

2024年11月9日

信徒召命コースを修了して

尾関敏明（北海道教区帯広聖公会）

1

これまでのトピックス

① 大学入学と受洗

北大入学と札幌聖ミカエル青年寮入寮
寮生活：毎朝の早祷礼拝、主日礼拝、青年会などに参加
聖書研究（月1回 水曜夜）
北大センターとの交流
受洗：1年考えて洗礼を受けられなければ退寮
青年会メンバーからのお勧め 外側から内側へ
受洗後の生活
教区教会合唱団セシリアクワイヤでの交流
教区連合青年会事務局担当

3

1. 自己紹介

1944年11月	誕生（現在80歳） 以降、大学入学までキリスト教との関係は無し
1964年4月	北海道大学入学 恵迪寮入寮希望したが不可 札幌聖ミカエル青年寮に入寮 札幌聖ミカエル教会に関わる
12月	三沢康二司祭より洗礼を受ける
1968年3月	北海道大学卒業 三沢司祭より「卒業する時は、神学院へ行くか否かを考えなさい」と言われた。
4月	（株）東芝に就職。火力、原子力発電所用機器製造部門に 配属 横浜聖アンデレ教会、逗子聖ペテロ教会に所属
2006年	現役退職。北海道帯広市に転居し、嘱託業務と両親介護 北海道教区帯広聖公会に移籍
2011年3月	完全退職、東日本大震災、東電福島第一原子力発電所爆発事故に遭遇

2

②1968年からの会社員生活と教会生活

高度経済成長時代のエネルギー産業の発展
原発建設と大型化に伴う技術革新
横浜聖アンデレ教会での日曜学校奉仕 青年会
横浜教区宣教主事との関わり
1977年 大磯アカデミーハウスでの「あすの教会をきづく会」参加

③ 就職と会社員生活

就職にあたり三沢司祭から言われた事「神学校へ行くかどうか考えなさい」
東京芝浦電気株式会社（後の（株）東芝）京浜事業所に就職
独身寮入寮前に横浜聖アンデレ教会牧師館にて
横浜聖アンデレ教会日曜学校教師
教区宣教主事や神学校卒業した聖職候補生との交わり

東芝の重電基幹工場である京浜事業所（鶴見）にて熱交換器の開発・設計・管理などに従事火力、原子力、地熱、などの機器に関するトラブルシューティングも原子力用機機には特別な注意を払う

4

2. 信徒の召命コース応募までの経緯

- ① 日常業務と「原発の安全神話」
- ② 1977年 「あすの教会をきづく会」に参加
- ③ 2011年3月 福島第一原発爆発事故と退職
- ④ 「いのち」への気付きと加害者意識
- ⑤ 2012年日本聖公会宣教協議会
- ⑥ 脱原発の活動
北海道教区教会での脱原発講演会
「泊原発を廃炉にする会」参加
管区日本聖公会正義と平和委員会 原発問題プロジェクト参加
- ⑦ 2017年1月アッシジ巡礼の旅参加
- ⑧ 「いのち」の尊厳性とは？
- ⑨ 2020年 聖公会神学院「信徒の奉仕・召命コース」開設
- ⑩ 5月 入学

5

4. 私は「信徒の召命コース」で何を学んだか

聖公会神学院在籍期間：2020年5月～12月（8月の帰宅時間を含め8か月）

大学では機械工学を学び、総合電気会社の電力機械の部門に就職し、32年間過ごしてきた。
大学入学と共に生活の場となった札幌聖ミカエル教会青年寮に入寮したことから入信し、生活の場は変化した。教会生活を継続することとなった。

2020年、神学院というアカデミックな生活環境が与えられたことは実に不思議と言わざるを得ない。

短期間の神学院生活であったが以下のような学びがあった。

- ① 短期間ながら多くの履修科目があり、信仰領域の広さを知ることができた。
- ② 今後の信仰生活や教会生活の中で直面するであろう諸課題に対して、臆けながらに取り組み方針や手段を選択する方法が明らかになった。
- ③ 全ての取り組みが容易なものではなく、自分に残された時間も十分ではないが、「いのち」をKey Wordにして自分のペースで取り組むことが大切であると確信を持った。
- ④ これらの行為は私にとって新しい「生き直し」の繰り返しとなる。過去を肯定しつつ、新しい気づき、未来への確かな希望を常に更新してゆくことが重要と思える。
- ⑤ 私の今後の生活領域は拡大でなく縮小と予想される。そうした中で得られる小さな気づきや発見を感謝と喜びを感じつつ過ごしてゆきたい。
- ⑥ このような生活は私に常に「最上のわざ」とは何か、とか「共にあることの喜び」（詩篇133）を繰り返し与えられるものとなるだろう。

7

3. 聖公会神学院での生活（全寮制）

- ① 礼拝：7：30～ 朝の礼拝 17:30～夕の礼拝
- ② 授業：9:00～17:00（日によって授業の時間が異なる。授業数（2～5科目／日）
- ③ 食事：朝食（学生のみ）、昼食（職員同席）、夕食（学生のみ）、土曜日、日曜日はなし
- ④ 日曜日：近隣の教会にて礼拝、または奉仕実習

履修科目（信徒の奉仕・召命コースのみ）

新約聖書入門
旧約聖書入門

ギリシャ語
教会史入門

教会の礼拝

聖公会論

教理学

宣教と奉仕職

信徒のための宣教とミニストリー

聖書を通しての黙想と分かち合い

教会音楽

バイコン（Bible Contents）

クラスの持ち方（時間：1.5時間）

テキストが決められ、適当な範囲を事前に読み、纏めておき、授業の最初に分担した所を発表する。

その後、講師のコメントや学生の質問についての議論などが行われる。

6

5. 現状認識

現状認識（ヒルダ・ミッシェル信徒講座）

日本聖公会においては、教会数に対して聖職者の数が足りないため、教会活動が停滞する現象が少なからず起きています。

そこで、昨年度のヒルダ・ミッシェル信徒講座では専業聖職にだけ依存しない、新たな宣教の担い手を加えたチームミニストリーを目指すため、特任聖職にスポットを当て、その働きを学びました。

今年度の講座では、さらに宣教の担い手の裾野を広げ、信徒の働きの多様性に着目し、将来有望なチームミニストリーのあり方を検討します。

私の現状認識（北海道教区の現状）

教会数22 聖職者11 嘱託聖職者3 （2024年10月）

信徒数の減少傾向、高齢化が続いていた。同時に教役者数も減少していた。→ 協働牧会
牧師による聖餐式が出来ない時→ 信徒奉事者の司式による「み言葉の礼拝」実施

8

6. チームミニストリー

* 奉仕とは変化を希望していくことである。変化は「目的」と「価値」がなければならない。そしてそれは「共有」されなければならない。一中略一奉仕が「変化を希望」することであれば、キリスト者の務めは「変化」であるとも言える。一中略一「変化」はキリスト者にとって本質的なものである。「変化」は排除すべきものではなく、我々の規範なのだということを認識しなければならない。

(中村真希執事 「神学の声」 vol49no80 2020 pp46)

* 牧会指針

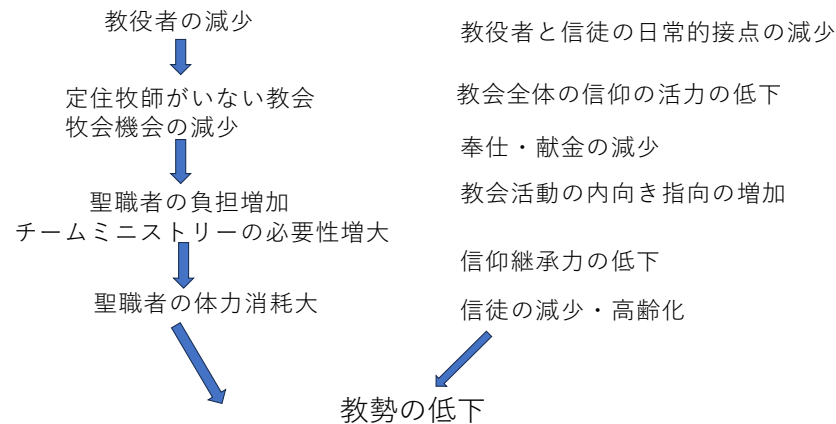
1. 教会は建物ではなく、ナザレのイエスが始められた運動を引き継ぎ、神の国を指し示す共同体。
2. 宣教共同体としての教会のすべては、Jesus Movementの「活動員」(activists)を生み、育てることにかかっている。
3. 牧師中心、司祭中心の教会は、必ず衰退する。
4. 信徒の役割を極力小さくし、牧師中心で進む教会に成長の可能性はない。
5. 教会の中に、「これを私たちの宣教の働きとしてやろう」という、コミットメントのある信徒を3人見つけれれば、基本的に何でもできる。

2024年10月5日 ヒルダ・ミッシェル信徒講座
塚田重太郎司祭の講演より

9

10

教会の活性低下の傾向



11

遠隔地教会の宣教活動支援

- A. 信徒奉事者の育成と活用
地域に密着した宣教のキーパーソンとしての信徒奉事者の育成と活用
信徒奉事者の教育機会の提供
教育は聖公会神学院やウィリアムス神学院の協力を頂く。
信徒奉事者同士の助け合いや後継者の育成にも配慮する。
- B. 遠隔地教会の活力回復支援
隣の教会の信徒奉事者との交流（協力）と計画・支援（チームとして）
地域担当司祭を交えた宣教会議と実施項目、支援のあり方などを決定
それぞれの教会に持ち帰り、実行計画を立てる。
それぞれの計画の支援について相談し、実行計画を練り直す。
信徒奉事者を実行とレビューを繰り返す。
教区への支援依頼は、宣教活動協力費お活用を検討する。

12

日本聖公会法権法規の見直し・改訂

1. 信徒奉事者の役割の見直し・改訂
第63条（信徒奉事者）
 2. 信徒奉事者は礼拝において、また、宣教において、牧師に協力する。
2. 日本聖公会として、各教会における信徒奉事者の育成と活用の計画を作成し、主教の承認のもと実施する。
3. 信徒奉事者の年齢は、各教会の状況に応じ、概ね30歳以上とし、教区主教により委嘱される。その任期は1年とする。

注力が必要と思われること

パートナーとしての信徒奉事者の継続的育成
（特任聖職の育成に加えて）

チームミニストリーの深耕と
サーバントリーダーシップの研修・実践